

初学鑑賞者の性格特性と俳句の好みの関連性

—「切れ」の効果を中心として—

佐藤手織*

The Novices' Liking for Haiku and Their Personality

— Focusing on the Effect of 'kire' —

Taori SATO*

Abstract

The purpose of this study was to examine the relation between novices' liking for haiku and their personality by manipulating the strength of 'kire' in haiku. The results were that introverted subjects' liking for haiku varied much with 'kire' in haiku and that they liked the haiku in which 'ya' was used as 'kireji' less than extroverted subjects. They are discussed in terms of subjectivity/objectivity of haiku and the prospect of further research is suggested.

Keywords: haiku, kire, extroverted/introverted, subjectivity/objectivity

背景

俳句の代表的な特徴として、五七五の定型音数律・季語と並んで、切れの存在が挙げられる。切れは、主に「や」「かな」「けり」に代表される切字により句中・句末に発生し、省略・強調・間・韻律等にかかわる機能を有するとされる(安部・辻, 2005; 長谷川, 2005; 小川, 2003)。いずれを重視するかは論者によって意見の分かれるところだが、これらの機能により俳句は、本来後続すべき七七の付け句や論理の展開・感情の叙述を旨とする日常的な散文脈から「切れ」(前者は、俳句が本来俳諧の連歌の発句であった歴史的経緯を反映し、後者は、川柳や新興俳句が概して切れが弱いという事情と関連している)、一句としての自立性を獲得することになる(復本, 1999; 仁平, 1986, 2000; 小川, 2004)¹⁾。

佐藤(2005)は、122名の初学者を対象に調査

を行い、外向型の鑑賞者は、内向型の鑑賞者より俳句を全般的に好むが、特に切れの弱い俳句を好み、一方、内向型が外向型よりも好む俳句もしくは外向型とほぼ同程度に好む俳句は切れが強い傾向を見出した。この研究は、俳句の主観性・客観性についての好みと鑑賞者の性格との関連を検討することが目的で、主観抒情・客観写生をそれぞれ主特徴とする「馬酔木」・「ホトトギス」系の俳句を素材として調査が行われたが、このようないわゆる俳壇史的文脈に則った形での両者の関係を直接確認することはできなかった。一方、上述のような、切れに関する知見を俳句の主観性・客観性の問題と関係づけることで間接的な検討はできたが、切れの効果自体、研究の当初の関心ではなかったため、十分な検討ができなかった。

本論文の目的は、鑑賞者の俳句の好みに及ぼす切れの効果について、さらに詳細な事実確認を行い、あらためて俳句の主観性・客観性の問題と関係づけることで考察を深化することにある。具体的には、著名な俳句の一部を改変する

平成 17 年 12 月 16 日受理

* 感性デザイン学科・助教授

ことにより、切れの強弱を操作し²⁾、鑑賞者の好みへ及ぼす影響を検討する方法を採る。

方 法

質問紙：前回の調査で外向型が内向型よりも特に好んだ（切れが弱い）俳句と外向型と内向型とで好みの差がほとんどなかった（切れが強い）俳句から4句ずつ選び、さらに2句を加えた合計10句をオリジナルとして、半分の5句は切れが強まるよう、残りの5句は切れが弱まるように改変した(表1参照)。A4用紙1枚に、オリジナルの俳句と改変された俳句の1組を印刷し、質問紙の1ページとした。10組の俳句のペアについて質問紙10ページ分が用意されることになる。さらに、教示・課題の練習・性別/年齢/氏名欄、俳句の既知性チェック欄・調査者の問い合わせ先をそれぞれ印刷した1ページずつ

をその前後に添付し、合計12ページの質問紙が作成された。オリジナルの俳句と改変された俳句を1ページに並記する順序はランダムにされ、また、2～11ページの俳句のペアの記載は五十音順である(図1参照)。

対象：東北地区3大学の文科系（教育学、人文科学）の学部生・大学院生97名（男性26名、女性71名）に調査を依頼した。質問紙の俳句について既知性を問う事後のチェックにより全員俳句の初学者と見なして差し支えない一方、文科系であることから、俳句に対する一定の興味・感受性は期待してよいと考えられる。調査に先立ち、全調査対象者に向性検査・YG検査が実施され、その結果に基づき対象者の群分けが行われた。向性指数が120～139点でYG検査の結果がB・D類、もしくはYG検査の結果にかかわらず向性指数が140点以上の対象者を外向群、一方、向性指数が61～80点でYG検査の

表1 質問紙に記載された俳句

オリジナル			改変	
切れ：	弱	→	強	
鮫鱈の骨まで凍ててぶち切らる (加藤楸邨)			鮫鱈や/骨まで凍ててぶち切らる	
うすらひは深山へかへる花の如 (藤田湘子)			うすらひや/深山へかへる花の如	
瀧の上に水現れて落ちにけり (後藤夜半)			瀧の上/水現れて落ちにけり	
夏草に機織車の車輪来て止まる (山口誓子)			夏草や/機織車の車輪来て止まる	
向日葵の蕊を見るとき海消えし (芝不器男)			向日葵の蕊見れば海消えにけり/	
切れ：	強	→	弱	
をりとりてはらりとおもきすすきかな/ (飯田蛇笏)			をりとりてはらりとすすきおもかりし	
来しかたや/馬酔木咲く野の日のひかり (水原秋桜子)			来しかたの馬酔木咲く野の日のひかり	
金剛の露ひとつぶや/石の上 (川端茅舎)			金剛の露がひとつぶ石の上	
白藤や/揺りやみしかばうすみどり ³⁾ (芝不器男)			白藤の揺りやみしかばうすみどり	
夏の河/赤き鉄鎖のはし浸る (山口誓子)			夏の河に赤き鉄鎖のはし浸る	

※ /は、もう一方の句と比較して切れが強い箇所を示す。

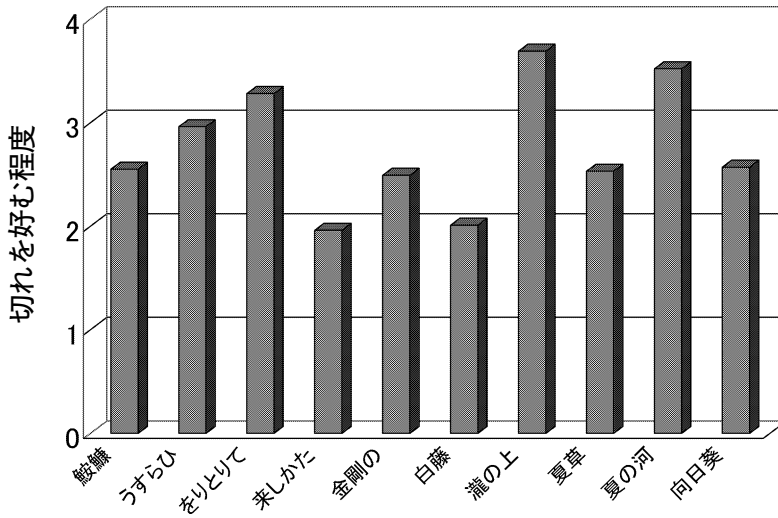


図1 俳句と「切れ」を好む程度との関係

結果がC・E類、もしくはYG検査の結果にかかわらず向性指数が60点以下の対象者を内向群としたところ、外向群は25名、内向群は21名となった。

手続き：質問紙は、各大学の教員を介して、対象者に個別に配布された。対象者の課題は、質問紙の各ページの俳句のペアについてオリジナルの俳句と改変された俳句を鑑賞・比較し、どちらがより好ましいかを4段階評定（オリジナルの俳句のほうがとても好ましい、オリジナルの俳句の方がやや好ましい、改変された俳句の方がやや好ましい、改変された俳句の方がとても好ましい）することである⁴⁾。対象者は自己のペースで評定を行い、終了後、調査者に質問紙を郵送する形で回収が行われた。

結 果

・切れの強弱と俳句の好みとの関係

全調査対象者のデータから、10組の俳句のペアについて切れが強い方を好む程度（以下、評定値）の平均を算出し、図1に示す。さらに10組のペアを混みにした平均値は2.76であった。この値を基準としてノンパラメトリック検定を

行った結果、「瀧の上～」「夏の河～」「をりとりて～」のペアでは切れが強い俳句が好まれる一方、「白藤～」「来しかた～」のペアでは切れが弱い方が好まれる傾向が有意に認められた(1%水準)。また、オリジナルの俳句の作品としての完成度が好ましさに影響を及ぼしている可能性を検討するために、図1の数値を一部修正し、オリジナルの好ましき評定の平均値を算出した(図2)。この値がとる範囲は1.31～3.52と幅広く、また、2.5を基準としたノンパラメトリック検定の結果が有意ではなかったことから、上記の可能性は否定された。

・鑑賞者の向性と俳句の好ましきとの関係

図1の評定値が大きい順に俳句を並べ替え、かつ、外向群・内向群ごとに評定値の平均を示したのが図3である。t検定により両群を比較した結果、「来しかた～」のペア（外向>内向）で有意な差(5%水準)、「白藤～」(外向>内向)のペアでマージナルな差が認められた。

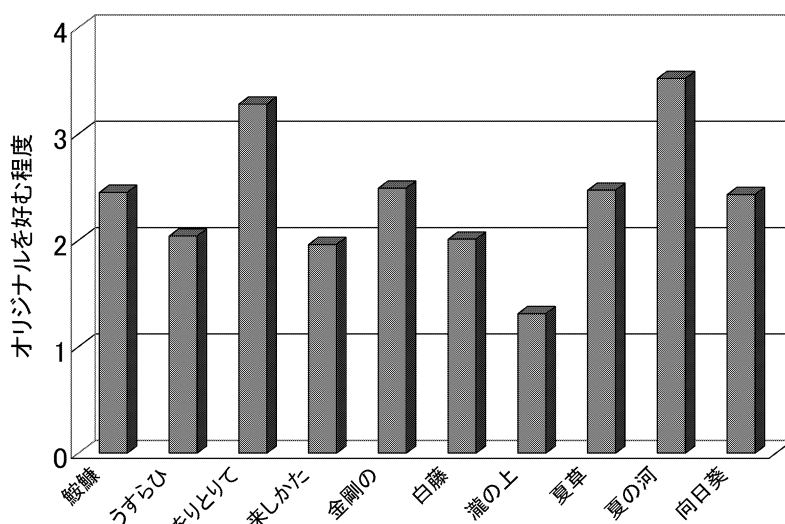


図2 オリジナルの俳句を好む程度

考 察

・切れの強弱と俳句の好ましさと関係

鑑賞の対象となった俳句10組を、図1の評定値が高い5組(上位群)と低い5組(下位群)に分類して考察する。上位群では「瀧の上～」 「夏の河～」 「をりとりて～」 など、切れを強くするために、切字「かな」「けり」による句末の切れ、もしくは体言による句中の切れが用いられている一方、「来しかた～」 「白藤～」 「金剛の～」 など下位群ではすべて切字「や」による句中の切れが用いられている点が特徴的である。使用される切れによって評定値が大きく変化することがうかがわれる。ただし、上位群の「瀧の上～」 「夏の河～」 の組では、切れが弱い方の俳句が同時に字余りである点にも注意が必要である。字余りを嫌い、切れの強い俳句が定型であることから好ましいと判断した可能性がある。

・鑑賞者の向性と俳句の好ましさと関係

図3より、外向群の評定値はばらつきが小さい(2.40～3.64, レンジは1.24) 一方で、内向群は評定値のばらつきが大きい(1.81～3.86, レン

ジは2.05) ことが、全体的な傾向としてうかがわれる。この点についてまず、2つの可能性を検討しておきたい。

第一に、前項で指摘したとおり、「瀧の上～」 「夏の河～」 のペアにおける字余りが評定値に影響した可能性である。しかし、この2つのペアでは、外向群と内向群の評定値の大小関係が逆転しており(「瀧の上～」 では外向<内向、「夏の河～」 では外向>内向)、特定の向性の被験者が字余りについて一定の態度を示すとは考えられないため、上記の可能性は否定される。

第二に、内向群の評定値のばらつきは、俳句についての好悪ではなく、態度表明の明確さの反映なのではないか、という可能性である。これは、図3の右端、すなわち評定値が極端であるペア(「来しかた～」)において、外向群・内向群の間に有意な差が認められたことから考察された。そこで、評定値1・2を「好まない」、評定値3・4を「好む」として一括し、向性の差によるクロス集計表(表2)を作成し、 χ^2 二乗検定を実施したところ、 t 検定で有意差が見られた「来しかた～」のペアでやはり有意差(5%水準)が見られた。したがって、外向群・内向群では

初学鑑賞者の性格特性と俳句の好みの関連性 (佐藤)

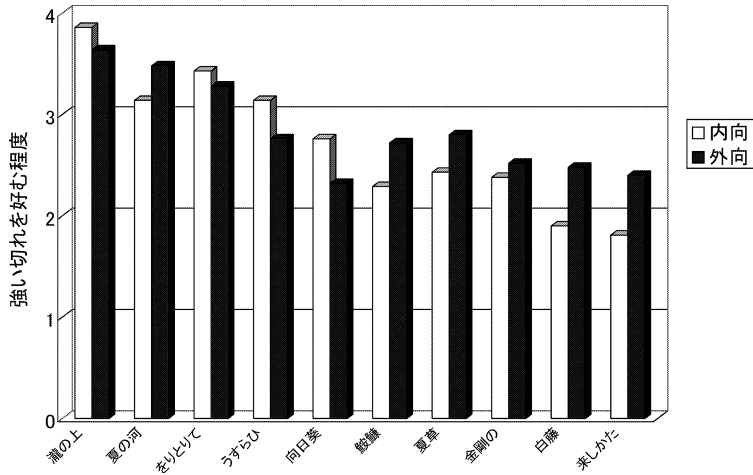


図3 鑑賞者の向性と俳句の切れに関する好ましき関係

表2 鑑賞者の向性と切れの好ましきとのクロス集計表

	鮫鱈		うすらひ		をりとりて		合計
	好む	好まない	好む	好まない	好む	好まない	
内向	13	8	5	16	4	17	21
外向	10	15	9	16	6	19	25
合計	23	23	14	32	10	36	46
	$\chi^2=2.190$ n.s.		$\chi^2=0.801$ n.s.		$\chi^2=0.165$ n.s.		
	来しかた		金剛の		白藤		合計
	好む	好まない	好む	好まない	好む	好まない	
内向	16	5	13	8	14	7	21
外向	11	14	11	14	15	10	25
合計	27	19	24	22	29	17	46
	$\chi^2=4.878$ $p < .05$		$\chi^2=1.466$ n.s.		$\chi^2=0.218$ n.s.		
	瀧の上		夏草		夏の河		合計
	好む	好まない	好む	好まない	好む	好まない	
内向	0	21	10	11	6	15	21
外向	0	25	12	13	2	23	25
合計	0	46	22	24	8	38	46
	統計量は計算されず ³		$\chi^2=0.001$ n.s.		$\chi^2=3.362$ $p < .10$		
	向日葵		合計				
	好む	好まない					
	9	12	21				
	13	12	25				
	22	24	46				
	$\chi^2=0.382$ n.s.						

そもそも好悪の感じ方に差があると考えられ、第二の可能性も否定された。内向群の評定値のばらつきは切れの種類によると考えるのが妥当であろう。

一方、図3に示された向性による評定値の差に注目すると、切字「や」が用いられているペアの多く(6組のうち5組)で外向群の評定値が高く、「や」以外の切れ(「かな」、「けり」、上五の体言)が用いられているペアの多く(4組のうち3組)で内向群の評定値が高いことが、全体的な傾向としてうかがえる。この傾向を解釈するには、切字の種類により、鑑賞者への心理的効果がどう異なるかを考慮する必要があるだろう。仁平(2000)は、「や」「かな」「けり」は文法的には「詠嘆」の意味を持つが、切字として用いられる過程でこの本来の意味は弱められ、ものごとを「提示」する機能を持つようになったと述べている。これは、彼の言葉で言い換えるならば、「感動というものは大きければ大きいほど、言葉で説明するのが困難」なため「感動の対象を提示するだけで、野暮な説明はしない」(仁平, 2000, pp. 32-33)ことであり、他の論者が切れの効果として指摘する対象化・客観化の効果と軌を一にするものと言える(鷹羽, 1976)。本論で調査対象となった初学者には、強い断定の意味を持つ「けり」を含む「や」以外の切字は「提示」の機能が強く、逆に、もともと感動・呼びかけの意味を持つ「や」は「詠嘆」の意味合いが強い切字として認識されたのではないだろうか。前者は客観的、後者は主観的な印象を鑑賞者に与えると考えられ、この解釈は、外向型が主観的な俳句を好み、内向型が(相対的に)客観的な俳句を好むとした佐藤(2005)の考察とも対応する。

総合的な考察と今後の展望

ここまでの議論は、以下のように総括される。

① 内向型の鑑賞者は、切字「や」を用いた俳句よりも、それ以外の切れを用いた俳句を好む

傾向がある。② この傾向は、「や」以外の切れが対象を「提示」し、俳句の客観的な印象を強める反面、切字「や」は「詠嘆」の意味合いが強く、俳句の主観的・抒情的な印象を強めるためと考察される。

本論では、さまざまな切れが用いられる俳句の好ましさと鑑賞者の性格との関連について一定の知見を確認し、さらに切れの種類と俳句の主観性/客観性との関係性の観点から考察を深めることができた。今後の課題は、俳句の主観性/客観性と鑑賞者の性格との関係を、あらためて検討することである。佐藤(2004)は、非日常的な世界である「異界」のイメージの検討を通して、現実や日常を「意味づけ」された世界として認識する傾向が内向型に強い可能性を示唆した。背景・考察でも述べたように、俳句の切れの本質は、対象を客観化し、説明(意味づけ)や抒情を旨とした日常的な(散)文脈を拒否した自立性を獲得することにある。切れの種類により変化する俳句の主観性/客観性に関する好みは、日常性/非日常性への親和性に通じ、その点で鑑賞者の性格と関係するのではないだろうか。このような可能性をも念頭に置き、今後検討を重ねたい。

注

- 1) 特に、句中の切れによって俳句が自立性を獲得することについての議論は、仁平(1986, 2000)を参照のこと。
- 2) 皆川(2005)は、著名な俳句の切字「や」を他の文字に置き換え、統語的特徴・情緒の意味に及ぼす影響を検討している。その際、改変された俳句は「短文」と呼称されている。
- 3) この句は「白藤や～」の記載が一般的だが、「白藤の～」の記載も散見される(鷹羽, 1976)。本論では便宜上、「白藤や～」をオリジナルの俳句、「白藤の～」を改変された俳句とする。
- 4) オリジナルの俳句と改変された俳句を別個に評定する方法も考えられたが、以下の3つの理由から本文に表記された方法が採られた。① 先行研究(佐藤, 2005)で確認された、外向型が俳句を全般的に好むことによる効果を相殺する ② 好ましい俳句を強制選択させること

初学鑑賞者の性格特性と俳句の好みの関連性 (佐藤)

で結果の解釈を容易にする ③ 鑑賞者の回答の負担を軽減する。

引用・参考文献

- 安部元気・辻 桃子 2005 俳句入門・再入門 創元社
- 長谷川権 2005 一億人の俳句入門 講談社
- 復本一郎 1999 俳句と川柳 講談社現代新書
- 川名 大 2001 現代俳句 上・下 ちくま現代文庫
- 皆川直凡 2005 俳句理解の心理学 北大路書房
- 仁平 勝 1986 詩的ナショナリズム 富岡書房
- 仁平 勝 2000 俳句をつくろう 講談社現代新書
- 小川軽舟 2003 切字・切れ 「俳句研究」編集部(編) 俳句実作の基礎用語 142-143 富士見書房
- 小川軽舟 2004 魅了する詩型—現代俳句私論— 富士見書房
- 佐藤手織 2004 「異界」のイメージを分析する 八戸工業大学紀要第23巻 151-160
- 佐藤手織 2005 俳句の主観性・客観性に関する初学者の好みと性格特性 八戸工業大学紀要第24巻 205-211
- 鷹羽狩行 1976 俳句のたのしき 講談社現代新書
- 山西雅子 2004 俳句で楽しく文語文法 角川書店